

大学生のスポーツ活動に関する 価値意識の検討

—夏休み中のスポーツ活動との関連から—

小泉昌幸
尚美学園大学

伊藤巨志
新潟県立大学

渋谷崇行
新潟県立大学

松下高信
金城大学

A Study of the Value Awareness about the Sports Activity of the University Students —Connection with Sports Activity during Summer Vacation—

Masayuki, KOIZUMI Kiyoshi, ITOH
Takayuki, SHIBUKURA Takanobu, MATUSHITA

Abstract

It is necessary to acquire a manner, the ability that can manage the time when a university student is free by oneself premeditatedly. I think that the ability becomes the base of sports throughout the life.

This study examined value awareness about the sports activity of the university student and how to spend free time of the summer vacation of the university student and the connection of the exercise custom.

1. The university student recognizes the value that sports have.
2. The university students who worked on sports during summer vacation were less than half.
3. Spend it by “TV and the video seeing and hearing” that the university student “does not do as for what than much free time moves exercise and a body to play sports in the summer vacation either”; do it.
4. The university student who did not work on sports tended not to work part-time.
5. When sports are valuable acts, it is understood, but it is thought that the consciousness of the university student is not suitable for playing sports.
6. The teacher must provide a lecture letting you acquire a manner, the ability that can manage the sports activity in a class by oneself premeditatedly using the time when a university student is free.

要 約

本研究は、第一に大学生がスポーツ活動に関してどの程度の価値意識を有しているものなのかを明らかにすることである。そして第二に大学生が価値を有しているであろうと思われるスポーツ活動について生活行動が最も多様になる時期、言い換えれば自由な時間が最も取れる夏休みにどの程度スポーツ活動を行っているのかその実態を明らかにすることを試みた。また、大学体育におけるスポーツの生活化指導のための基礎的な資料を得ることも目的の一つである。

結果、大学生はスポーツの持っている価値は認識していたが、夏休み中にスポーツ活動を行った大学生は、半数以下であった。夏休みは多くの自由時間があるものの、運動やスポーツをするといった体を動かすことをするよりも、大学生は、「何もしない」とか「テレビやビデオ視聴」で過ごすということに時間を使っていた。このような大学生の時間の使い方についてももう少し詳細に調べてみなければはっきりとしたことは言えないが、深夜までテレビやビデオ（DVD）の視聴をしていて、日中は休んでいるという生活リズムになってしまっているのではと推察する。大学生は、自由な時間がある、なしにかかわらず、スポーツは価値のある行為だとはわかっていてもスポーツをすること自体に意識が向いていないから以上のような結果になると考えられる。

キーワード

スポーツの価値 (Value awareness for sports)
 スポーツ活動 (Sports activity)
 大学生 (University student)、夏休み (Summer vacation)

1. はじめに

価値とは、「主体の欲求を満たす、客体の性能」である。すなわち、価値とは、第一に人々の欲求に最終的な基礎をおくものであって、なんらかの神秘的なもの、超経験的なもののうちに基礎を持つものではない。第二に、主体の欲求の相関概念であって、対象自体に内在しているものではない。第三に、価値は主体の属性ではなく、「客体側の」属性である。第四に、価値とは客体それ自体ではなく、客体の「属性」(性能、性質)である。⁽¹⁾

つまり価値とは、主体(個人であれ集団であれ)の欲求を満たす限りにおいて「のぞましきもの」ではなく、「のぞましさ」であると定義している。⁽¹⁾ また、Schwartzは「重要性において変化する、状況を超えた望ましい目標」と価値について定義し⁽²⁾、価値は趣味や行動の動機付けに影響し、人生を導く理

念として作用すると指摘している。

スポーツ行動は、意識的であれ、無意識的であれ、価値の選択に基づく行動であり、行為者の内部における価値選択のメカニズムを経て発現される行動である。⁽³⁾ また、スポーツの価値は人々のスポーツ参加に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

高橋らは、我が国における現代のスポーツは、大衆化や高度化とともに、さまざまな価値や概念が認められる多様性をも、その背景としている。したがって、かかるスポーツ振興は、それを反映した価値多元的な視点をもつ政策志向へと方向づけられているとしている。⁽⁴⁾ スポーツの多様化とは、個人や集団がスポーツを実施するにあたり、多様な価値選択を行う結果あらわれる現象と考えることができる。現代社会では、スポーツに関しての価値意識が多様化してきていることは周知の事実である。私たちの生活の中でスポーツの価値は高まり、多様な楽しみ方の広がりを

みせている。これはスポーツが日常における生活や生涯の価値と深く関わりはじめたこと意味し、多様なスポーツの楽しみ方は余暇生活の中におけるスポーツの位置づけの重要性をあらわしているといえる。

太田はスポーツの価値の類型化をおこなうにあたり、スポーツに対する価値意識の全体からスポーツにおける価値を導きだし、下記に示すように価値の類型化をはかった。

「健康」は、社会的パースペクティブとしては“自己”本意の価値であり、時間的パースペクティブからみれば“現在”“未来”の両方にかかわり“幸福”を探求価値とする“欲求性向”が支配する価値。

「体力づくり」は社会的パースペクティブからみれば、“自己”本意の価値であり、時間的パースペクティブからみれば“未来”に関わる“利”価値として類型化でき“幸福”が究極価値として考えられる。

「精神力」は、社会的パースペクティブとしては“自己”本意の価値であり、時間的パースペクティブとしては“未来”に関わる“利”価値として類型化できるが、社会的パースペクティブが“社会”本位になるにつれて“正”価値となり、究極価値としては“真”価値となる。

「人間性」は社会的パースペクティブからみれば“社会”本意の価値であり、時間的パースペクティブにおいては“現在”“未来”の両方にかかわることから、“愛”価値から“正”価値へと移行し、究極価値として“善”が演繹できる。

「社会性」は社会的パースペクティブからみれば“社会”本位の価値であり、時間的パースペクティブにおいては“現在”“未来”の両方にかかわることから、“愛”価値から“正”価値へと移行し、究極的価値として“善”価値が演繹できよう。

「楽しさ」は社会的パースペクティブからみれば“自己”本意の価値であり、時間的パースペクティブからみれば“現在”中心のものであることから“快”価値として類型化できる。

「勝利」は、社会的パースペクティブからみれば“自己”本意の価値であり、時間的パースペクティブからみれば“現在”中心のもので“快”価値として類型化できるが、スポーツにおける勝利は、「大会出場」「試合や成績・記録」と当然かかわってくる。

「リーダーシップの獲得」は基本的には、社会的パースペクティブの中で“自己”本意の属性となるが、“社会”本意の性能とも考えられる。時間的パースペクティブからみれば“現在”中心から“未来”中心へとひろがっていく。つまり、“快”“愛”価値から“利”“正”価値へ移行し、究極的には、“幸福”“善”価値にまで昇華される場合もある。

「大会出場」は、時間的パースペクティブにおいて“現在”中心から“未来”中心へとひろがる価値であり、社会的パースペクティブからみれば“自己”本意のものである。よって“快”価値“利”価値の系列に類型化されるが、究極的には“真”価値となる以上“自己”本意から“社会”本意に移行するならば“正”価値としても類型化できる。

「成績・記録」は、大会出場と同様に、時間的パースペクティブにおいては“現在”中心から、“未来”中心へとひろがり、社会的パースペクティブにおいては“自己”本意としてとらえられることができよう。しかしながら、これも究極的には“負”価値として位置づけられる以上“自己”本意から“社会”本意に移行するならば“正”価値としても類型化することもできる。

「カッコ良さ」は、究極的価値としては“美”価値として類型化できる。時間的パー

スペクティブは“現在”中心であり、社会的パースペクティブは“自己”本意から“社会”本意へとひろがり、“快”“愛”そして“美”の系列に類型化できる。

「技術の向上」は、時間的パースペクティブにおいては、“未来”中心のもので、社会的パースペクティブからみれば“自己”本位から“社会”本意へとひろがる“利”“正”に類型化でき、究極的には“真”価値として導かれる。

これらスポーツにおける価値が価値の構造的次元と類型にいつづけることができ、単一の形態をとるものから究極的価値を持っているものまでさまざまな様相を呈している。人々は、快・苦の基準だけで、スポーツに参加しているのではないことがわかつている。⁽⁵⁾

本論ではスポーツの価値に関して、この価値の類型化を用いて論を進めていくことにする。

社会の様々な分野において、技術の高度化・情報化等の進展が著しく、これらは、国民に恩恵をもたらしている反面、人間関係の希薄化、精神的ストレスの増大や運動不足、新たな職業病の増加、心身両面にわたる健康上の問題を生みだしてきている。国民の健康をめぐって様々な問題が指摘されてきている今日、その克服のため一人一人が、自分自身の心身に関する問題として意識し、生涯にわたって主体的に健康の維持・増進を図っていくことは不可欠なことであると考えられる。

生涯にわたり心身の健康を維持・増進していくためには、健康に関する正しい知識と理解を持つとともに、ヘルスプロモーションの考えに基づき、健康にとって必要なことを実践していくことを習慣づけることが重要である。その中でも、運動・栄養・休養は、基本的な生活習慣の一部であり、個人のライフス

スタイルと関わるだけに、一人一人の主体的取り組みが必要不可欠であるといえる。

現代の生活環境の中で、日常生活における身体活動が減少傾向にあるということを考えると、将来へ向けて個人が主体的にスポーツ実践に取り組むことが重要になるといえる。そのために自由時間を主体的に活用し、豊かなスポーツライフを実現していくことは、心身の健康に大いに寄与するものである。

そして、スポーツを生活に欠かせない文化として個人の生活の中に根付かせることが、健康的な社会を実現することにもつながってくるといえる。つまり、生涯にわたってスポーツに親しみ、健康や体力の維持・増進のための基礎的な能力や態度を身につけ実践していくこと、よくないことをやめるという行動変容を実践できる能力を身につけることが必要になってくる。⁽⁶⁾ 余暇活動としてのスポーツがその活動を通して文化の担い手となることから、人々にとって「参加の喜びばかりでなく、ルールやマナーに導かれ、参加する個人の主体的努力によって、倫理的、社会的な行動基準や人間関係を調整する機能を持つと同時に、健康効果も期待できる」とし、「個人の幸福への不可欠の活動として位置づけられる」そして、これと同様にスポーツが「生の充実」「生の実現」のためにあると考えられる。これらのことからわかるように、人々にとって余暇としてのスポーツ参加が持つ意味は大きいといえる。それは、生涯体育の観点と社会教育の観点から見ても重要である。

大学における体育・スポーツ活動の目的の一つとして、生涯にわたってスポーツ習慣を形成・定着させる視点に立ってスポーツの意義や価値を体感する経験を積ませることにあろう。学生の心身の調和的発達を促し、心身の不調に対応できる体力の養成を図ること、健康やスポーツに関する科学的に裏付けられた

運動実践を行えるようにすることなどスポーツが、その大学生にとって生涯にわたって心身ともに豊かな生活を送るための糧となるよう、大学生の実践力を育てることが大切であるといえる。⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾

三戸は、大学生のスポーツの価値観について、その価値体系から明らかにした。その結果、価値項目の評定平均値が高いものは、「楽しむ」「仲間つきあい」「チームワーク、団結」および「礼儀」であったとしている。また、「勝つこと」「興奮させる試合」「上手にプレイする」「良い印象」などに低い価値観がみられたとしている。⁽¹⁰⁾池野らは、多くの大学生は学校での体育授業やクラブ活動を離れると日常での運動量は激減する。フィットネスや健康についての意識は高いにもかかわらず調査した58%の学生がほとんど体を動かしていないという現状を報告している。⁽¹¹⁾また、但尾は、大学生は、健康・体力などに関心を示し、身体活動の好き・嫌いでは、多くの者が身体活動を好んでいいるが、スポーツの実施状況では、大変低い数値を示している。これはスポーツを最終的に実施するか、しないかは個人の主体性によるものと考えられるとしている。⁽¹²⁾羽床らは、健康や運動に対する意識・行動の変化に焦点を絞って調査を行った。その結果としてスポーツや運動をすることが好きと回答した学生の9割以上が日常生活の中で何も行っていないという結果であったとしている。また、スポーツや運動をおこなっていない学生のうち8割は運動の必要性を感じていながらも実際には「時間がない」「機会がない」「場所がない」という理由で何もしていないという結果を報告している。⁽¹³⁾

そこで、本研究では上記の研究結果を踏まえ、第一に大学生がスポーツ活動に関してどの程度の価値意識を有しているのかを明らか

にすることである。そして第二に大学生が価値を有しているであろうと思われるスポーツ活動について生活行動が最も多様になる時期、言い換えれば自由な時間が最も取れる夏休みにどの程度スポーツ活動を行っているのかその実態を明らかにすることを試みた。そして今回の調査で得られた結果より、大学体育におけるスポーツの生活化指導のための基礎的な資料を得ることも目的の一つである。

2. 研究の方法

大学生519名を対象として、2012年9月から10月にかけて質問紙法による調査を行った。調査の方法は、授業時間を利用し集団記入の形式で調査者が説明をしながら実施した。記入漏れ、記入ミスがあったものを除き有効回答数469、有効回収率90.7%であった。調査内容については、学生のスポーツに関する価値意識、夏休み中の生活時間、スポーツ活動等について質問紙を作成した。

3. 結果と考察

表1は、スポーツの価値について「体力づくり」「健康」「精神力」「人間性」「社会性」「技術の向上」「楽しさ」「成績・記録」「大会出場」「カッコ良さ」「リーダーシップ」「勝利」の12項目⁽⁵⁾であらわし、それぞれの価値項目に対して「5非常に価値を認める」「4やや価値を認める」「3どちらともいえない」「2あまり価値を認めない」「1全く価値を認めない」とした5段階評定により回答を求め、その平均値を示したものである。平均値が4.00以上の高い値を示したものは、「健康」の1項目、また3.50以上の値を示したものは、「体力づくり」「精神力」「人間性」「社会性」「技術の向上」「楽しさ」の6項目であった。

表1 スポーツの価値

	Mean ± SD	
体力づくり	3.964	1.084
健康	4.070	1.009
精神力	3.925	1.026
人間性	3.793	1.018
社会性	3.729	1.009
技術の向上	3.834	1.033
楽しさ	3.932	1.068
成績・記録	3.469	1.020
大会出場	3.256	1.111
かっこ良さ	3.247	1.055
リーダーシップ	3.309	1.054
勝利	3.461	1.053

この結果より、大学生はスポーツという行為の持つ価値について、「健康体力づくりの手段」「スポーツの技術も楽しみながら習得できるもの」また、「何かをやり抜く意志の力」「他人と良好な関係づくり・集団（仲間）形成」というものが得られるものと考えている。「成績・記録」「大会出場」「勝利」の項目に関してはスポーツにおける競技的側面の価値について学生は認めているといえる。「リーダーシップ」については、競技的側面における項目のほか、「社会性」「人間性」にも関連している価値と学生は感じているのではないかと思う。この結果は、三戸の調査結果⁽¹⁰⁾と同様の結果を示しているといえる。

以上の結果からわかるように、大学生はス

ポーツが価値のあるものであるという認識を持っていることが明らかになった。そこで、次に価値があると認めているスポーツ活動を夏休み中に大学生がどの程度行っていたか、その割合について示したものが表2である。

表2は夏休み中のスポーツ実施状況についてみたものである。スポーツをした大学生は、46.1%、スポーツをしなかった大学生は、53.9%であった。半数以上の大学生が夏休み中にスポーツ活動をしていなかったという結果であった。

スポーツ活動についてさまざまな面でその価値を認めてはいるが、実際にスポーツ活動を行った大学生は、半数にも達していなかった。

表2 夏休み中のスポーツ実施

		%
スポーツをした	216	46.1
スポーツをしていない	253	53.9

n=469

表3 夏休み中の自由時間

	～2時間	2～4時間	4～6時間	6～8時間	8時間～	
スポーツをした	28	65	56	49	18	(n=216)
	13.0%	30.1%	25.9%	22.7%	8.3%	
スポーツをしていない	41	63	70	68	11	(n=253)
	16.2%	24.9%	27.7%	26.9%	4.3%	

表4 自由時間の過ごし方（スポーツをしなかった学生）

	何もしていない	テレビ・ビデオ (DVD) 視聴	学習・読書	ゲーム	パチンコ・パチスロ	カラオケ	ショッピング	ドライブ	その他
スポーツをしていない	66	62	18	35	15	21	15	15	6
	26.2%	24.5%	7.1%	13.8%	5.9%	8.3%	5.9%	5.9%	2.4%

(n=253)

表3は、大学生の夏休み中の自由時間（家事、睡眠、アルバイト、食事、などを除いた時間）についてみたものである。

夏休み中の自由時間に関しては、スポーツをした大学生も、スポーツをしなかった大学生も同様の傾向を示していた。

次に夏休み中にスポーツをしていない大学生の自由時間の使い方（スポーツ活動以外）について、主にどのように過ごしていたのかについてみた結果が、表4である。

スポーツをしていなかった大学生は自由時間に「何もしていない」26.2%「テレビ・ビデオ（DVD）視聴」24.5%という結果であった。この2項目だけで50%を超える値を示していた。次いで「ゲーム」の13.8%で、これらの行動は、体を動かすこともなく、座っ

たまの状態か寝転んだままの状態であったのではないかと推測できる。

池野や但野の報告にもあるように、「大学生は学校での体育授業やクラブ活動を離れると日常での運動量は激減する」、「身体活動の好き・嫌いでは、多くの者が身体活動を好んではいるが、スポーツの実施状況では、大変低い数値を示している」と指摘しているが、本調査結果でも同様なことがいえるのではないかと考えられる。大学生は、スポーツ活動は価値のある行為であると認めてはいるが、夏休みの自由になる時間があってもスポーツ活動は行わなかったという結果であった。

表5は夏休みにスポーツを行った大学生の自由時間の使い方（スポーツ活動以外）について、主にどのように過ごしていたのかにつ

表5 自由時間の過ごし方（スポーツをした学生）

	何もしていない	テレビ・ビデオ (DVD) 視聴	学習・読書	ゲーム	パチンコ・パチスロ	カラオケ	ショッピング	ドライブ	その他
スポーツをしていない	35	67	15	24	12	17	19	13	14
	16.2%	31.0%	6.9%	11.1%	5.6%	7.9%	8.8%	6.0%	6.5%

(n=216)

表6 夏休み中のアルバイト

	アルバイトしていた	アルバイトしていなかった
スポーツをした	119	97
	55.1%	44.9%
スポーツをしていない	105	148
	41.5%	58.5%

$\chi^2 = 8.62603$ $p < 0.001$

いてみた結果である。表4のスポーツを行わなかった大学生と比較すると「テレビ・ビデオ(DVD)視聴」については31.0%と少し高い値を示しているが、「何もしていない」という項目に関しては、16.2%と低い値を示していた。自由時間に全く何もしないで過ごすのは、スポーツ活動を行ってなかった大学生のほうが多いという結果であった。両者を比較したとき、この2項目が顕著に異なった結果を示した。

表6は、夏休み中のアルバイトについて、スポーツをした学生とスポーツをしなかった学生についてみたものである。

この結果からみると、スポーツをしていなかった大学生はアルバイトもしていない傾向にあった。とにかく体を動かすことが嫌いなのではないかと推察できる。

以上、大学生のスポーツに関する価値意識とそれに関連して大学生の夏休みの生活時間、スポーツ活動についてみてきた。

徳永らの調査によると、「学習時間」「自由時間」「画像視聴時間」等の時間的要因は、中学生、高校生、大学生、社会人といった各ライフステージによって、スポーツ実施・非実施の規定要因として有効であったり、なかったりという結果が出ている。⁽¹³⁾

運動やスポーツをしない理由としてよく「時間がない」ということがあげられている。確かにスポーツをするためには時間が必要で

ある。過去の研究結果についてみると自由時間の要因がスポーツ行動に関与している場合もあれば、そうでない場合もある。そうでない場合もあるということは、自由時間のある、なしはスポーツ行動の決定的要因ではないということである。この点は、糸野⁽¹⁴⁾や荒井⁽¹⁵⁾も指摘している点である。

江刺も、学生の生活とスポーツに関する社会学的研究のなかで1950年から1975年にかけての先行研究の検討を行っている。その中で学生の自由時間は平日は4時間前後、休日は8時間前後あり、その使い方について活字文化やマスコミ文化を享受し、スポーツ活動の余暇生活に占める程度はそう高くないとしている。⁽¹⁶⁾ 社会環境の変化で学生が余暇に行う活動に違いはあるものの、この頃から学生は積極的に自由時間をスポーツ行動へ向けるということはなかったといえる。

また、西尾は、大学生の課外スポーツについて調査した結果から、「大部分の学生は、スポーツをやろうと思えば暇はつくれる」と指摘している。⁽¹⁷⁾ 個人の生活パターンによって差異もあると思うが、自由な時間はある程度まで作り出すことはできると考えられる。それをどのような活動に配分するかは、個人の意識や価値の問題でもあるといえる。したがって、スポーツ行動は、自由時間の存在を前提としながらも、必ずこれによって規定されるものではないということである。

今回の調査では、具体的に時間があるのか、ないのかという質問はできなかったが、大学生の夏休みの自由時間をみると必ずしも時間がないとはいえないと思う。時間がないのではなく、ほかの理由でスポーツをしなかったと考えることができる。夏休みは、1日を自由な時間として使うことができる。アルバイトをしているために運動やスポーツをする時間がとれないという理由からではなく、何もしないとか、テレビやビデオを見て過ごすといった時間の使い方をしている学生が多かったということである。おそらくその学生にとって、運動やスポーツなどをして体を動かすという価値よりも、何もしないで過ごすという価値の方が高かったのではないかと考える。ただ、何もしないことが価値のある行為なのかということについては疑問の残るところである。

4. まとめ

本研究では大学生のスポーツ活動に関する価値意識について大学生が自由な時間を多様なスタイルで長期間とることのできる夏休みの自由時間の過ごし方やスポーツ活動（運動習慣）との関連についてみてきた。また、自由な時間を計画的に自己管理することができるという態度・能力は、生涯スポーツの基盤となるのではないかと考え方から、今回の調査分析の結果として以下のことが明らかになった。

- 1 . 大学生はスポーツの持っている価値は認識している。
- 2 . 夏休み中にスポーツ活動を行った大学生は、半数以下であった。
- 3 . 夏休みは多くの自由時間があるものの、運動やスポーツをするといった体を動か

すことをするよりも、「何もしない」とか「テレビやビデオ視聴」で過ごすという大学生が多数を占めていた。大学生の夏休み中の時間の使い方にもその原因があるのかどうか再調査しなければならないと考える。

- 4 . 大学生はスポーツ活動に価値意識があると認識してはいるが、自由になる時間が日常よりも多くとれる夏休みにスポーツ活動に向かわないのかという結果についても再度調査を行いその理由を明らかにしなければならないと考える。
- 5 . スポーツ活動を行わなかった大学生はアルバイトもしていないという傾向にあった。このような大学生は、とにかく体を動かすことが嫌いなのではないかと推察することができる。
- 6 . 自由な時間がある、なしにかかわらず、スポーツは価値のある行為だとはわかっていてもスポーツをすること自体に大学生の意識が向いていないと考えられる。
- 7 . 体育授業の中で教員は、スポーツ活動を習慣化させるための授業を展開しているが、今回調査を行った大学生の運動習慣の有無という観点からみると、小学校から高等学校まで12年間体育授業を受けてきたにもかかわらず、運動・スポーツを生活化できている学生はそれほど多くはなかった。大学における体育授業において不規則な生活に陥りがちな学生に対して、自由な時間を使ってスポーツ活動を計画的に自己管理することができる態度・能力を身につけさせるような講義を提供し、スポーツ活動の意義を理解させ実践させること重要であると考えられる。そしてそのことが生涯スポーツへの基盤となることを学生に認識させること必要であると思われる。

参考文献

- (1) 見田宗介・栗原彬・田中義久編「社会学事典」弘文道：東京，144-150.1992
- (2) Schwartz, S. H. Are there universal aspects in the structure and contents of human value? Journal of Social Issues . 50(4).19-45. 1994
- (3) 上杉正幸「スポーツ価値意識論の方向性」体育社会学研究会編，体育社会学研究6，道和書院：東京，193-211.1977
- (4) 高橋伸次，時本識資「スポーツ参加の多様性と21世紀社会に向けたスポーツ振興の機軸 「する」スポーツへの多様な関わり方の振興 」地域政策研究，第2巻 第1・2合併号，35-55.1990
- (5) 太田雅夫「スポーツにおける社会科の研究」順天堂大学大学院体育学研究科 修士論文，1981
- (6) 保健体育審議会「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」保健体育審議会答申：3.1997
- (7) 保健体育審議会「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」保健体育審議会答申：31.1997
- (8) 熊本水頼「大学保健体育改革の提言」全国大学体育連合総会報告資料，1986
- (9) 前田充明「大学体育の在り方について」大学体育：27.12(3)：3-15.1984
- (10) 三戸範之「大学生のスポーツ価値観に関する研究」秋田大学教育文化学部研究紀要58.49-55、2003
- (11) 池野三義、大坪輝海、富永佐知子「大学生のスポーツ・運動行動とその意識に関する調査」鎌倉女子大学紀要 第9号，99-106.2002
- (12) 但尾哲哉「女子大学生の生涯体育指向の研究」親和女子大学児童教育学研究10.57-76.1991
- (13) 徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本公雄「スポーツ行動の予測に関する研究」昭和57年度文部省科学研究費（一般研究B）研究成果報告書：33-45.1983
- (14) 糸野豊「これからの生活とスポーツ」，糸野豊編著，現代社会とスポーツ，不昧堂出版，東京：19.1977
- (15) 保健体育審議会「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」，保健体育審議会答申：2.1997
- (16) 江刺正吾「学生の生活とスポーツに関する社会学的研究 特に、先行研究（1950年～1975年）の社会学的視点からの検討 」体育社会学研究6 スポーツ参与の社会学225-244. 道和書院，1997
- (17) 西尾貫一「大学の課外体育（その6），一般学生の課外スポーツ実践と関心の程度の問題について 」体育学研究，6 1:86.1961